

26 群状植栽導入試験

担当者 青森営林署造林係 田中完吾
 金木営林署造林係長 木下洋一
 " 小田川担当区主任 高嶋正紀
 開発期間 昭和45年～47年
 経費

開発目的

ヒバ伐跡地の造林の省力化をはかる方法として、群状植栽の導入の仕方およびその利点を究明する。

開発計画

46年度と同一につき省略

実施経過

項目	青森署	金木署
プロット設定	45年5月23日	45年5月
地ごしらえ	45年5月28日～6月3日(人力)	"
植付	45年6月22日～27日(人力) 自署八甲田苗畑産苗木3年生	"
施肥	45年5月28日～6月3日(穴底混合間土)	"
下刈	45年8月24日	45年7月
成績調査	45年11月13日～18日(伸長量ほか)	45年11月
施肥	46年6月7日	46年5月
下刈	46年7月4日	46年7月
成績調査	46年11月9日～16日	46年11月
下刈	47年7月21日～24日	野兎被害により、調査不能となったため調査せず。
成績調査	47年10月24日～11月7日	

開発結果

<青森署>

1. 成績調査

1群当 り本数	調査 本数	樹 高						枯 損				
		当初	45年秋	46年秋	47年秋	伸長量	伸長率	45年	46年	47年	計	率
4	木 240	35.7 ^{cm}	47.7 ^{cm}	86.2 ^{cm}	127.3 ^{cm}	91.6 ^{cm}	257 [%]	本 6	本 3	本 1	本 9	本 4
5	300	35.0	44.8	78.5	118.9	83.9	240	12	9	7	28	9
7	420	32.3	42.4	74.7	113.4	81.1	251	25	5	7	37	9

2. 生長量の分散分析

処理 ブロック	4 本	5 本	7 本
1	102.0	95.4	89.1
2	97.4	75.0	85.3

変 動 因	自由度 f	平方和 S	平均平方 V	Fo
全 体 T	5	472.88		
処 理 A	2	138.24	69.12	1.58
ブ ロ ッ ク B	1	247.00	247.00	5.64
誤 差 c	2	87.64	43.82	

$$F(2.2; 0.05) 19.0 > F_0$$

$$F(1.2; 0.05) 18.5 > F_0$$

3. 被害の内容

区 分	死 害	先 枯	折 損	計	調 査 総 数	被 害 率
4 本	16 本	1 本	7 本	23 本	240 本	10%
5 本	5	2	12	19	300	6
7 本	41	4	2	47	420	12

4. 考 察

- (1) 成長量は処理間(4本、5本、7本)に有意差がなく、ブロック差もない
樹高は健全木のみについて調査した。
- (2) 被害は1群当り本数より地形の影響が多く現われている。
- (3) 本実験結果からは造林木が若くて相互に影響し合う大きさに達していないので優劣は定めがたい。今後の経過を見守りたい。

<金木署>

1. 成績調査

野兎被害甚だしく、群構成の完全なものがなくなり、開発目的の比較調査ができない状態となったため成績調査は中止した。

2. 野兎被害の程度

年 度	被 害 率	う ち 枯 損	摘 要
4 5	2 5 %	9 %	
4 6	5 5	2 4	
4 7	5 5	2 5	

3. 考 察

- (1) 日照時間の長い斜面に被害が多い。
- (2) 加害部は地上20cm以下が多く幹部切断が多い。
- (3) 初年度の激害木は翌年度以降も繰返し被害を受けている。
- (4) 樹高60cm以上になると幹の被害がなくなる。

以上のことから、群状植栽の群外枝条等が野兎の生息条件を好適にし、これが被害に結びつくものと考えられる。また初年度の被害木が2年次以降も繰返し加害されているが、これは野兎の好む養分を含有するものなのか、若芽が好飼となるものなのか不明であるが今後調査を続け解明したい。

群状植栽を実施するに当っては特に野兎被害の防除を組み込んだ方法をとることが重要である。

評 価

群状植栽個所の野兎被害が激増しており、これの防除対策について検討する必要がある。